

回想の中の本間喜一先生 一人の縁（えにし）をめぐって―

前国立国会図書館長 大滝 則忠

(2015 年 7 月 26 日 山形県川西町農村環境改善センター)

はじめに

皆様、こんにちは。このような機会にお話させていただくことを、大変に光栄に存じております。3 年前の平成 24(2012)4 月に第 15 代国立国会図書館長に就任して以来、川西町の原田俊二町長さんはじめ、地元の多くの方々から激励いただいているお蔭で、この 3 年間、何とか職務を果たすことができております。大変に有り難く、引き続いてよろしくご支援のほどをお願いいたします。

本日は「回想の中の本間喜一先生」という題でお話させていただきますが、はじめに、本間喜一先生は、とにかく郷土の大先輩で、もう仰ぎ見る存在でありますから、そのような先生について私ごとがお話することは、非常に僭越至極のことであると考えています。とにかく後輩の私にとって、本間喜一先生はいつも身近に感じ、気になっている大きな存在であります。

私は東京オリンピックが開催された昭和 39(1964)年に東京教育大学に入学しましたが、本間喜一先生に保証人になっていただくため、東京のお宅でお会いいただいたことを鮮明に記憶しています。ただ、その時に何の保証人をお願いしたのか、正直言ってはつきり覚えていません。大学の保証人なのか、それとも、私は入学と同時に米沢有為会の学生寄宿舎である東京興譲館寮に入りますが、その保証人なのか、私自身わからなくて、今朝、私の 104 歳の父に聞いたら、大学の保証人をお願いしたということでした。私の父は、町の福祉のおかげで、町内の施設にお世話になって、長生きさせていただいていることを感謝しているところです。

愛知大学とのご縁（えん）としては、中学 1 年時からの担任の井上慎先生が、愛知大学を卒業したばかりの新採の社会科教諭で、井上先生には中学時代の 3 年間、ご指導いただきました。本日は、中学時代に学年担任としてお世話になった佐藤通夫先生もわざわざ会場にお見えで、大変に恐縮しております。

私は 10 年前に国立国会図書館を副館長で退職しますが、その後、東京農業大学で教壇に立っていた平成 22(2010)年 8 月に、愛知大学東亜同文書院大学記念センターが米沢市内の東部コミュニティセンターで開催した講演会の際に帰省して、聴かせていただきました。そこで、本間喜一先生の娘さんの殿岡晟子さんに本当に久しぶりでご挨拶できた次第です。その際の展示、さらに、その年末に川西町のフレンドリープラザで開催された「本間喜一展」も大変に興味深く見せていただきました。そして、ようやく平成 24(2012)年 5 月、館長就任の直後ですが、豊橋キャンパスを訪問させていただいて、前から気になる存在が、ますます大きくなって来たという経過です。

本日お話をさせていただくことは、もちろん本間喜一先生に関することであります。その準備で、愛知大学が平成 23(2011)年に刊行した加藤勝美さん著『愛知大学を創った男たちー本間喜一、小岩井淨とその時代』という 529 頁の大冊に、大変お世話になりました。また、喜一先生の娘さんの殿岡晟子さんには、先の米沢での再会以来、様々な機会を通じて、いろいろご教授をいただいていることを感謝いたします。

そして、本日お話する内容としては、あと 2 つの柱を加えさせていただきます。まず、喜一先生の実の叔父さんで、養親子の関係にもあった本間則忠さんのこと。これは、偶然にも同じ則忠という珍しい名前で、しばしば忠則と間違えられますが、私の人生で知った同じ則忠を名乗る人の存在は、本間則忠さんともう一人現存の方だけです。同郷に同名の先達がおられたこと、それも同じ流れにある学窓の大先輩でもあることで、本間則忠という人物についての関心が深まっています。

また、旧米沢藩域のある置賜地方の育英団体で、明治中期から活動している米沢有為会に関しても取り上げます。この関連では、特に郷土史家としての松野良寅先生の業績から様々な教えていただいていることを、まずお断りして感謝いたします。

ただ、お詫びすべきは、日頃の多忙に紛れ、いろいろな調査がいまひとつの中間段階であるということをお許しください。今後とも継続的に調べを続けたいと思っています。また、地元の皆様にお聞きいただくと、多分細かなところで私の誤解があることが明らかになると思います。その点は、後で温かくこっそり教えてください。

本日のお話は、学術研究発表ではなく、個人的な回想の報告としてお聞きいただくようお願いします。「回想」と名づけましたが、回想は基本的に自分の直接体験が中心になる一方、それ以外に他人の体験、先人の経験で本や雑誌などに書かれたものを読むこと、またはそれらの口伝を通じた疑似体験も重要です。直接体験と疑似体験の両方で「体験」した「回想」をお聞きいただこうと思います。なお、これからお話する中では、登場人物の敬称を、本間喜一先生以外は原則として省略させていただくことも、お許しください。

私は図書館に勤めていますから、様々な文献が幸い身近にあります。長年、自分なりに本間喜一先生、それから本間則忠についての文献を調べてきていますが、3 年前に現在の職務を担うことになってから、諸事に紛れて自分の調査資料が手元のどこに何があるのかが全く分からなっている状況です。そこで、今回の調査では、改めて国立国会図書館や市立米沢図書館で、関係資料を再調査しました。その調査を通じて、社会的な記憶装置として人類の記録を保存し、誰もが利用できる図書館の役割の重要性を再認識しました。古代ギリシャの哲学者プラトンは、「人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられる…。書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫り付けられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。」(『パイドロス』 藤沢令夫訳、岩波文庫)と語っていますが、このような人間の性(さが)であるだけに、社会的な記憶装置としての図書館の役割の重要性が増すわけであります。

以上のように前置きして、本題に入ることにします。副題を「人の縁(えにし)をめぐる」といたしました。縁(えにし)は縁(えん)とも読めますが、人の縁(えにし)としては、様々に続き合う関係、それも利害関係で結びつくのではなく、自然的に発生した虚心の人と人の付き合いが続くこと、「縁(えん)は異なもの」と表現もありますが、人と人の縁

(えにし)の妙というものを感じながらお話したいと思います。

1. 本間喜一先生との縁

本間喜一先生との縁ということでございますが、私が喜一先生のご生前、警咳に接することができたのは3回だけです。最初は昭和30(1955)年の前後、私が小学生時代のある夏に、喜一先生が娘さんの晟子さんを伴って、私の玉庭の実家にお立ち寄りになりました。私の母と喜一先生、それからもう1軒、米沢市内の家具屋さんと3者名義で、村内の山林を共有していたので、その打ち合わせだったと思います。

私の実家では、子どもは大人の話に決して口を出さない大原則にはありますが、来客の際には子どもも必ず挨拶に出るという躰でした。そこでご挨拶後、大人同士の会話を脇で黙って聴かせていただいたということです。喜一先生は多分60歳代の頃、白っぽい上下の背広姿と、晟子さんのワンピース姿が、今も思い出されます。

その後、昭和39(1964)年、浪人1年を経て大学入学した私が19歳、先生が73歳の頃、杉並成宗のお宅に小松の羊羹を持って保証人のお願いに伺ったのが2度目です。そして3度目は、後に先生は娘さんの晟子さんのご一家と世田谷烏山に引っ越され、大学卒業した昭和43(1968)年、先生は喜寿の頃ということになりますが、国立国会図書館に就職した報告とお礼に伺いました。この3回が、本間喜一先生の警咳に接することができた経験です。先生は昭和62(1987)年5月9日に95歳で亡くなりますので、またお会いできなくなりました。

ところで、本日ご来場の皆様は、玉庭の方も含めて地元川西町からの方々が大多数だと思いますが、中にはそもそも、本間喜一先生がお生まれになった玉庭というのはどのような場



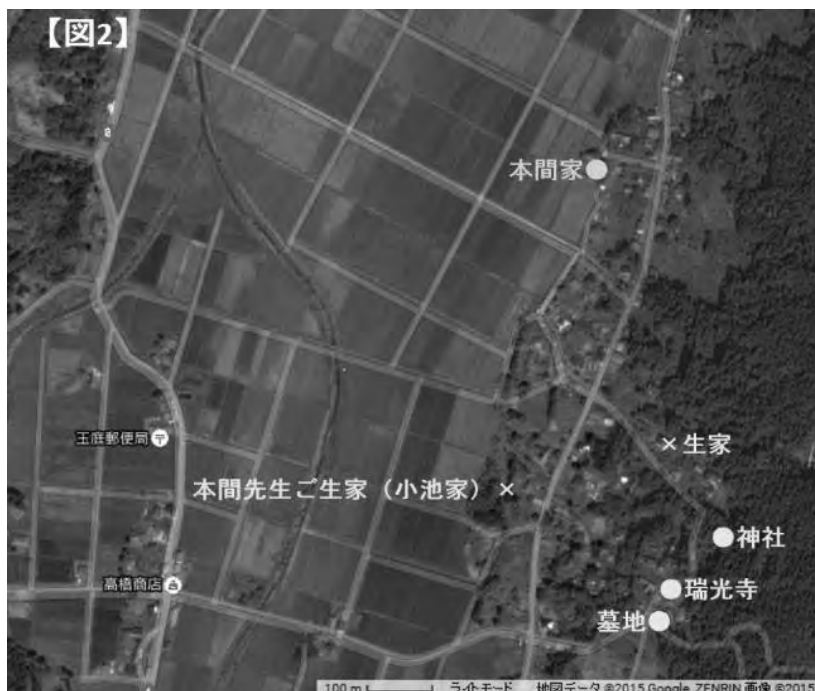
所か、まだご存じない方もいらっしゃると思いますので、少し地理的に紹介させていただきます。これは Google 地図から取ったもの【図 1】です。ご覧いただきますと、今、皆様は羽前小松駅がある街にあります。米沢市内から、左手に沢が 1 本、2 本とあって、そこを越えた左側のところに喜一先生のご生家がある玉庭の地があります。米沢城下から約 5 里 (20km) 離れた在郷です。

玉庭に至る道は、大きく 2 つの経路が中心になります。①路が、米沢市街から歩いて峠 2 つを越えて、玉庭に至る道筋、また②路は小松の街から 3 里(12km)を歩く道筋です。川西町の中心に至るこの②路は、何と言っても主になります。旧国鉄の米坂線の羽前小松駅—米沢駅間は大正 15(1926)年開通ですから、それまでは①路が主で、喜一先生のご幼少時はこの経路を歩かれたことだと思います。私の小学生時代の昭和 30 (1955) 年前後にも、毎年 4 月末の米沢藩中興の祖である上杉鷹山を祭る県社松岬神社のお祭り、いわゆる「県社のお祭り」見物に、この経路を歩きました。私の隣家のおじいさんが、「今日は城下に行ってくる」と私の親に話している言葉の響きが今も懐かしく思い出されます。ちなみに、『愛知大学を創った男たち』の著者の加藤勝美さんが辿られた経路は③路で、前に米沢—小松—玉庭の循環バスが走っていましたが、今はそのバス路線も廃止されています。

次の Google 地図は、喜一先生のご生家である小池家、そこから 300m ほど離れたところにある私の生家の位置関係を示しています【図 2】。神社があつて、瑞光寺があり、小池家の墓地があるあたりが一覧できます。上の方にある本間家は、喜一先生の父熊吉の弟である虎吉（後の則忠）が養子になった家で、小池喜一は後年に東京で、叔父である本間則忠の籍に入って、本間喜一となることになります。

愛知大学に所蔵されている晩年の喜一先生の手帳に書かれた絵地図【図 3】を見ますと、「チンジュ」と書かれた鎮守両皇太神社とか、この「ホーエン」と書かれた瑞光寺とか、それから先生の生家である小池家の位置関係が描かれています。真言宗醍醐派の瑞光寺は、喜一先生の祖母上、すなわち父熊吉と叔父虎吉（則忠）の兄弟の母上の実家で、尊敬を込めて「法印様」と呼ばれていました。文字では「ホウイン様」ですが、「ホーエン様」と訛って呼ばれ、私の耳にも今もそう響いており、喜一先生の絵にもそう表記されていることに、何とも言えず感銘を覚えます。

それでわが生家には、「テ」と書かれています。この「テ」の表記が最初は分からなかったのです



が、これは、私の祖父に「哲（てつ）」という弟がおりまして、その幼友達の家ということで、「テ」と記したと判別できます。喜一先生に成宗のお宅でお会いしたとき、「大滝の家は蔵の中まで分かる」という風に言っていました。先生が明治24(1891)年の7月15日生まれ、私の祖父の弟は9月25日生まれで、同年生まれ同級の遊び仲間だったので、お互いの家の座敷、蔵の中まで遊び場だったということ、先生が懐旧されたというわけです。この私の祖父の弟は、米沢郊外の村の農家に婿入りし、地元の育英団体のまとめ役



として、共有林の収益で地元の小学校にピアノを贈るなど活躍していたと聞きますが、昭和28(1953)年に亡くなっています。

そのような身近な人の存在もあって、本間喜一先生は一層、私にとっては気になる存在になったというわけです。そして次第に、喜一先生の実の叔父で、養親子の関係にもあった本間則忠も、私にとって気になる存在になってきました。

本間則忠は小池家に生まれ、喜一先生の父である熊吉の弟ですので、実の叔父と甥の関係になります。喜一先生は11歳の時に則忠を頼って東京に出て、13歳でその籍に入ります。そして一高、東京帝大法科での学業を終えて、法曹として検事、判事となり、27歳で結婚して、翌年に東京商科大学での教壇に立ち、31歳で分家して籍を抜くことになりますが、この18年間、すなわち則忠の39歳から57歳までの間、同じ籍にありました。喜一先生が分家届を出したのは大正11(1922)年12月で、翌年の大正12(1923)年1月には英米独の留学に旅立ちます。そして、その年の9月1日に関東大震災、その年にふるさと玉庭に電灯が灯りました。それまではランプ生活で、電灯が灯っていたとはいえ、私の小学生時代の昭和30(1955)年頃までよく停電して、小学生の私にとり、ランプ磨きが仕事だったことを思い出します。

本間喜一先生は、私にとってずっと気になる存在であり、その後の2件のエピソードを紹介させていただきます。まず、留学先のベルリンを訪問したこと。喜一先生は、大正12(1923)に留学の途に出て、ベルリンで一番長く生活されます。第一次世界大戦後の物価狂乱の時代状況を実地にご体験されて、その知見が東亜同文書院大学時代の財産管理、そして愛知大学の経営に様々な生かされたとお聞きします。私は副館長時代の平成15(2003)年8月、世界50か国以上の国立図書館長が一堂に会する会議に、当時の館長の代理として参加しました。その際、忙しい日程の合間を縫って、現在のフンボルト大学、すなわち喜一先生の留

学当時のベルリン大学を短時間ながらのぞいてきました。第二次世界大戦後は東西分割により壁で隔てられますが、その壁は既に崩壊しています。落ち着いた佇まいのキャンパスで、喜一先生が留学された時代を偲ぶことのできた思いです。

もう1件は、3年前の上野にある日本学士院講堂における日本学士院賞授賞式での出会いです。この授賞式は、明治に始まり、戦時中も欠かすことなく、歴代の天皇・皇后両陛下が臨席されている伝統ある場です。毎年、日本学術の第一線研究者10人程度に対する授賞式が举行されますが、例年、国立国会図書館長も招待されて陪席し、そこに同じく最高裁判所事務総長も招待されます。ご承知のとおり、戦後に新憲法のもとで最高裁判所が発足し、喜一先生はその初代事務総長でありました。会場の指定席で隣り合わせたのは第24代事務総長の方ですが、早速、同郷の先輩が初代であったことで話題ができ、若い方ですから当時のことを知るべくもないのですが、いろいろ会話をできました。その後、彼は最高裁判事に就任しますが、お会いする機会には、私が米沢の在郷の出身であることを思い出してくれています。これもひとえに喜一先生のご縁のたまものです。

2. 本間則忠と本間喜一先生

そこで、本間則忠と本間喜一先生に話を移します。まず私が注目したいのは、喜一先生が上京される契機が、生家である小池家の出で在京する叔父則忠（虎吉）という先達があったことが、東京に出る「つて」になったのではないかという点です。

喜一先生、当時の小池喜一の上京は、11歳時点の明治36(1903)年1月です。父母と何人かに送られて、東京の則忠の元に行きます。この当時は、東北本線が明治20(1887)年に仙台駅まで開通、奥羽本線の福島と米沢間の開線は1899(明治32)年ということで、喜一先生の上京の時点では、米沢駅から汽車を利用がすることができました。

後の話に関係するので念のためですが、汽車が米沢から山形まで開通したのは明治34(1901)年のことです。明治20年代からの東京における同郷人、置賜出身者がどのように交流したかについて後でお話しますが、当時の東京までの交通手段として、明治14(1881)年に三島通庸県令が栗子隧道を掘って以降、明治20年代には、この隧道を歩いて福島に出て、福島駅から汽車に乗ることができました。それが、明治30年代になって奥羽本線が開通して、ようやく米沢駅から汽車に乗って東京まで行けるようになり、明治36(1903)年の喜一少年の上京は、そのような時代であったということになります。

ここで、その喜一先生が上京するきっかけになった則忠の足跡について見てみます。本間則忠は、慶応元(1865)年8月25日、小池虎吉として、喜一先生の同じ生家で誕生しました。母上が藤田家、地元で「法印様」と慕われる瑞光寺の出で、同じ村内に婿入りした母上の叔父のもとで大工修行を始めたが、利発ゆえに山形の師範学校に入学したと地元で伝えられています。戦前の師範学校は教員養成のための学校で、官費が支給され、学費自弁の必要がありませんでした。明治17(1884)年、18歳で近くの本間家の養子となって、本間虎吉になります。その後、明治23(1890)年、24歳で師範学校を卒業し、県内の小学校に勤めて、明治27(1894)年、28歳で東京にある高等師範学校に進学しました。

戦前の高等師範学校は、明治19(1886)年に東京に設置され、明治35(1902)年の広島高等師範学校の設置に伴い、東京高等師範学校と改称し、東京高師と略称されます。高等師範学校は、全国各県に設置される学校教員を養成する師範学校や各地の旧制中学校等の教員を

養成して「教育の総本山」とも称された、なかなかの難関校であり、入学生は師範学校や旧制中学校の卒業生で、身体健全、知事の推挙等を要し、俊才が選ばれて入学していました。本間虎吉の時代はまだ東京だけで、その高等師範学校の理科に入学します。

当時の『高等師範学校一覧』によると、理科の同級生は 17 名、平均年齢が 23 歳となっています。各地の師範学校を出てから少し尋常小学校の教員を経験し、その後の高等師範学校への入学ということで、どうしても年齢が高くなるのですが、平均年齢 23 歳のクラスの中で、28 歳での入学ということになります。同年入学の他専攻も含めた本科生 95 人のうち、山形県出身が 17 名であったと記録されています。

明治 31(1898)年、32 歳で卒業して、長崎の師範学校に教員として赴任しますが、この頃に改名して本間則忠になります。在学中は官費で養われますので、卒業生は 10 年間、教育に関する仕事に就く義務がありました。

当時、高等師範学校があった場所は、現在のお茶の水駅の近くで、湯島聖堂に隣接していました。則忠(虎吉)はその寄宿舎に入ります。当時の校長は、教育者と同時に講道館柔道の創始者として有名な嘉納治五郎、この人は通算 25 年近く校長として在任しました。各年入学の本科生 95 人規模ですから、校長と学生が身近に接するところだったと想像できます。

東京高等師範学校のその後の変遷としては、校地を茗荷谷に移し、昭和 4(1929)年には専攻科を母体として旧制東京文理科大学が誕生、東京高等師範学校はその附置となりました。戦後学制改革で新制東京教育大学に移行し、昭和 42(1967)年、筑波大学に改組という歴史を重ねています。高等師範学校から現在の筑波大学までを含めた同窓会は茗荷谷に因んで名づけられ、茗溪会と称しています。川西町では小松生まれで米沢中学から進学した高梨健吉、慶応義塾大学教授で日本英学史の重鎮として活躍された方も卒業生です。玉庭地区からは本間則忠、それに私と川西町の小野庄士・現教育長が同窓というご縁です。

さて明治時代に遡って、当時、明治 27(1894)年の出版物『東京遊学案内』という受験案内雑誌の中では、東京のいろいろな大学・学校の特徴が描かれていて、現在、これは国立国会図書館デジタルコレクションの中に入っており、インターネット経由で閲覧できます。高等師範学校については、「師範学校および尋常中学校、旧制中学校の校長および教員を養成する所」で、「教科は大別して文科、理科とし、修業年限は各 4 ヶ年」と記載されています。戦前の各県の師範学校や各地の旧制中学校の校長及び教員を養成する学窓を、玉庭出身の本間則忠が卒業したということです。

本間則忠(虎吉)は、進学のため、まだ奥羽本線は開通していない時代に、栗子隧道を通って福島までの 40 数 km を歩いて、福島駅から汽車に乗って上京したということになります。則忠(虎吉)が、玉庭を離れたのは 18 歳の時点、山形までの 40 数 km も専ら歩く時代です。山形も福島も同じ 10 里程度の距離で、1 日ばかりで歩く行程だったと思います。則忠(虎吉)は、まず山形で学び、卒業後の教員生活を経て、その間も勉学を継続し、28 歳になって東京に進学しました。

一方、喜一先生、当時の小池喜一は、11 歳で叔父則忠を頼って上京します。恥ずかしながら私は米沢での高校時代の下宿生活を姉の庇護下にあり、その後、18 歳で東京に出ます。大時代的に言えば、皆、「志を立てて、郷関を出ず」を経験しているということになります。

「男子、志を立て、郷関を出ず、学もし成るなくんば、また還らず、骨を埋むるに何ぞ墳墓の地を期せんや」、墳墓の地は自分の生まれた先祖が眠る地、そこを離れて「人間到る処青

山あり」、どこにも自分の墓地となる青く美しい山はあるという心情を、幕末の人が詩に託しています。まさにこのような心情を胸中に抱きながら、それぞれの東京生活が始まったと思う次第です。

3. 明治の同郷人と米沢有為会の縁

ここで明治の同郷人と米沢有為会の縁(えにし)について、取り上げることにいたします。これは全体として、東京で活動する本間則忠、その元にいた喜一先生が、どのような同郷人と付き合う環境下で、精神生活が育まれたかの観点でお話しすることになります。

そもそも廃藩置県を迎えた米沢藩の状況はどうであったか。米沢藩と呼びますが、これは山形県南の置賜地方の全域に及ぶ旧上杉藩域のことです。ご承知のとおり会津から移封された当初は 30 万石、後に減封されて 15 万石、家臣団が士族だけで 6,700 余人。この数は、秋田の佐竹藩 33 万石、福井の松平藩 33 万石等の石高が倍以上の他藩よりも数が多く、福岡の黒田藩 46 万石と匹敵していました。ということは、狭い場所に多くの人がいて、職を求める状況で、自活するには様々厳しい環境下にあったことになります。自立して一日も早く正業に就くことを願って、上京して進路を模索する者の数も次第に増えていったという環境の中に、則忠(虎吉)もあつたし、そして喜一先生もあつたのだろーと思ひます。

この頃から旧米沢藩の中では、長男は師範学校、次男・三男は陸海軍にという進路のパターンが大体だったと、郷土史家松野良寅は書いています。要するに両方とも官費で勉強できるということです。山国の米沢からは海軍が多く、海軍大將が何人も誕生していますが、結局そういう地元の環境がその背景としてあつたことになります。

ここに「明治の同郷人」と題して、近代日本で活躍した米沢を中心とする置賜地方の多くの同郷人のうち、あえて 18 人に絞って一覧できるようにしてみました【図 4】。17 番までは故人です。代表的な同郷人がどの時代を生きたか、喜一先生が 20 歳の時点で、同郷人がどの年代で活躍されていたかを一覧できると思ひます。唯一ご存命の 18 番上杉邦憲さんは上杉家第 17 代の現当主で、私よりも 1 歳年上、昭和 18(1943)年生まれです。18 番の下にある線は、ここに自分の名前を記すことはあまりにも僭越なので無名にしてありますが、これは私です。こうして見ると、社会で活躍する同郷人の交流のうち、本間則忠が生きた時代、喜一先生が生きた時代がほのかに見えてくるような気がします。そして、これらの同郷人の交流の場となつたのが、東京における米沢有為会という団体の存在で、会合を開けば数十人規模が一堂に会する集まり等から、密な関係ができることになります。

米沢有為会は、明治 22(1889)年 11 月 23 日、郷土愛を土台に、相互の親睦と切磋琢磨を目的として発足しました。設立発起人は、後に建築家として文化勲章を受章する伊東忠太をはじめとする在京学生 6 人で、「有為会」の名称は、国家有為の人材を育てる意味から名づけられたと伝えられています。

ここで、在京の同郷人の中で、地元米沢ではあまり知られていないと言ひていますが、中條政恒という人物について、有為会の発足に関係することとして少し触れておきたいと思ひます。米沢には戦前からの中條(なかじょう)病院があり、そこに私の高校同級生がいますので、中條政恒とは親戚関係かどうかを聞いたら、違ふということでした。米沢藩出身の中條政恒は、福島県郡山の安積疎水を拓いた人として有名な方です。その息子が中條(ちゅうじょう)精一郎で、上杉の若殿様、後の 15 代憲章公と一緒にケンブリッジ大学に留学

本間 善一 先生20歳の時点

(1) 池田 成章 1840—1912 (米沢中学校長、県会議員、国務院議員、上杉家次男)

(2) 中條 政恒 1842—1900 (福島県議員、大蔵省少書記官)

(3) 上杉 茂重 1844—1919 (第14代)

(4) 平田 東助 1849—1925 (衆議院議員、内務大臣、農商務大臣、内大臣、伯爵)

(5) 本間 則忠 1865—1938

(6) 伊賀 忠太 1867—1954 (建築家、東京帝大教授、文化勲章受章)

(7) 池田 成彬 1867—1950 (財界人、政治家、三井各理事、大蔵大臣、農工大臣、逓信大臣、閣内閣顧問)

(8) 宇佐美 勘夫 1869—1942 (内務官、東京府知事、貴族院議員)

(9) 吉田 龍次 1874—1964 (教育学者、東京帝大教授)

(10) 上杉 善章 1876—1953 (第15代)

(11) 結城 豊太郎 1877—1951 (銀行家、安田銀行、日本興業銀行、郵工組合中央会理事長、日本銀行総裁)

(12) 北沢 敬二郎 1889—1970 (政治家、住友本社取締役、大丸社長、会長)

(13) 本間 善一 1891—1987

(14) 我妻 栄 1897—1973 (民法学者、東京帝大教授、貴族院議員、文化勲章受章)

(15) 宇佐美 勘 1901—1983 (銀行家、三菱銀行取締役、日本銀行副総裁)

(16) 上杉 善重 1917—1995 (第16代)

(17) 上杉 邦重 1943— (第17代)

(18) 上杉 邦重 1943— (第17代)



伊賀 忠太



本間 則忠



中條 政恒



上杉 茂重



平田 東助



上杉 善章



北沢 敬二郎



本間 善一



上杉 善重



上杉 邦重

▲ 20歳の時点 △ 60歳の時点

【図4】

明治の同郷人

して建築学を学び、日本を代表する建築家になります。代表作として慶應義塾の旧図書館、米沢の上杉伯爵邸も、この人の設計です。精一郎の娘が中條（宮本）百合子で、彼女のエッセーの中に、政恒が福島の改革途中で仕事から離されて東京に移り、「政恒という人は所謂乾分（こぶん）をつくらなかった。然し有望な青年達の教育ということには深い関心をもって一種の塾のようなものを持っていたことがあり、そこには長男であった父精一郎はじめ、何人かの青年が暮らした。伊東忠太博士、池田成彬、後藤新平、平田東助らの青年時代、明治の明けぼのの思い出の一節はその塾にもつながっていたらしい」（「明治のランプ」）と記しています。水沢出身の後藤新平を除いて、すべて米沢出身です。政恒はこういう若人の前で、郷土人の同盟、一緒に切磋琢磨することの必要性について情熱を持って説いていたであろうことが伝わってきます。

米沢有為会の発足前史としては、上杉家第 14 代茂憲公の求めで中條政恒らがアドバイスして明治 17（1883）年に始まった米沢教育会の育英活動があります。最近、山形市内にお住まいの直木賞作家の高橋義夫さんが、『沖縄の殿様』という書名の中公新書を刊行(2015)され、茂憲公が沖縄県令時代に教育に力を入れ、県費留学生として沖縄の若者を東京に留学させ、それらの人々が後に沖縄で活躍したことを描いています。茂憲公が沖縄県令を辞して元老院議員として東京に戻ってから政恒らと協議があり、米沢出身の子弟に対する東京留学のための奨学金を出す米沢教育会の活動が始まりました。資金として上杉家から年額 1,000 円の私財を拠出して、毎年 2 名程度を東京に留学させるというものでした。

先に述べたとおり、この先行する流れが、若き伊東忠太らに引き継がれて、米沢有為会の発足に至ったと言えると思います。米沢有為会は、郷土愛を土台にして、相互の親睦と切磋琢磨を目的として共存共栄を図る同郷人の団体として発足します。この同郷人には、米沢城下だけでなく、置賜一円が当然に含まれています。発足翌年の桜の季節、有為会は江戸時代からの桜の名所である飛鳥山に同郷の 40 人が集まって、運動会（現在の東京支部園遊会の嚆矢）を行ったという記録があります。

米沢有為会が発足した明治 22(1889)年当時、山形に置賜山形会という集まりがあつて、そこで東京での発足直後に会員勧誘が行われました。翌年度末までに東京、米沢、山形の有志 429 人が会員となって名簿が作られ、そこに「尋常師範学校」在籍の本間虎吉の名前が既に含まれています。このように本間則忠（虎吉）は、有為会に発足初期から参加し、上京後には在京の同郷人との交流の輪を広げていったことが想像できます。

米沢有為会は後に、育英団体として成長して、明治 42（1909）年の東京における学生寄宿舎の開設、明治 44(1911)年の奨学金貸与制度の創設が実現します。これらの育英事業は、現在も継続されており、明治期には財団法人、戦後の再建後には社団法人の認可を受け、平成の公益法人制度改革に伴い、平成 25(2013)年に公益社団法人米沢有為会となって活動の歴史を連綿と重ねています。

私はこの公益社団法人への移行のための準備委員会事務局を担当して、まず定款上の法人名称について検討しました。「米沢」有為会というのは、どうも米沢だけの、特に米沢興譲館高校同窓だけの集まりだという誤解がありますので、これを「置賜」有為会に変更する案も検討しましたが、結局、明治以来の長い歴史がある団体名ですので、引き続きこの名称とすることになりました。ただし、設立当初からそうであったように、会の活動は置賜地方 3 市 5 町の全体に及ぶ有為な人材育成と地域の福利増進にあるという点が改めて確認され



ました。「福利増進」というキーワードは、曖昧な言葉ではあるものの、いわば地域創生に寄与することが目的になります。

明治 22(1889)年に有為会として発足し、その後に米沢有為会と改称したこの会は、もうすぐ創立 130 周年の節目を迎えますが、郷土の若人の育英事業を柱に、置賜同郷人の交流の場としての伝統を有しています。このような伝統のもとで、本間則忠、それから喜一先生も、

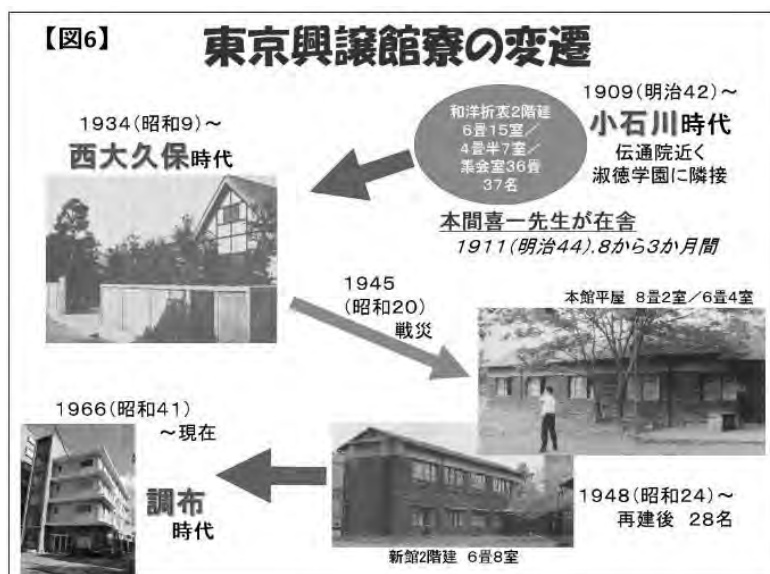
その価値観を共有していたのだろうと思います。

米沢有為会が成り立つ精神的な基盤としては、幕藩体制崩壊後の米沢藩主と旧藩士との協力関係において、通常であれば身分格式ということで目に見えない壁があるわけですが、米沢（置賜）地方においては、身分格式を越えた人間としての同郷人意識が根底にあって、先に述べた上杉茂憲沖縄県令の活動のように、教育を受ける権利を極力広範にして、同郷人としての相互扶助精神を発揮しようという同志が有為会に結集したということが出来ます。

米沢有為会の長い歴史においては、上杉家が果たされた役割は大きく、歴代当主【図 5】が常に深く関与され、節目には私財も投じられ、同郷人にとって一貫して物心両面にわたる要にあることを実感します。沖縄の殿様だった茂憲公に始まり、その息子の憲章公、孫の隆憲公、そして曾孫の現在の邦憲公ということで、連綿とお世話いただいています。私の大学在学時は、隆憲公の時代でしたが、寄宿舍の飲み会とか、米沢有為会の集まりにはご夫妻で参加されて、学生にとっても身近な存在でありました。隆憲公のご母堂が亡くなられたときは、葬儀の手伝いにお宅に伺い、庭掃除をした経験もあります。当代当主の邦憲公は、文部省宇宙科学研究所、現在の宇宙航空研究開発機構の教授としてはやぶさ開発にも関わられて退官され、現在、こまめに米沢有為会の会合にご夫妻で出ていただくなど、いろいろ関係いただいております。

4. 置賜の学生寄宿舍—東京興譲館寮

米沢有為会の育英事業として運営されている学生寄宿舍が、明治 42(1909)年 4 月に東京に開設され、その初期に本間喜一先生も 3 か月間の短期間ながら在舎した記録があります。米沢有為会の学生寄宿舍は「興譲館寮」と称していますが、その後、大正 3(1914)には仙台に、昭和 5(1930)年には札幌に、昭和 30(1955)年には山形に、それぞれ設置されます。今日も東京と仙台が引き続いていますが、山形は昭和 37(1962)年に、札幌は昭和 62(1987)年に、それぞれ廃止されました。明治以来、これらの在舎生の総数は優に 2,500 名を超え、平成元(1989)年の米沢有為会創立百周年の期に、寄宿舍 OB 会が結成されて活動しています。一方、奨学金貸与の実績としては、明治 44(1911)年以来、現在まで 400 人規模となっており、現在も継続して置賜地方 3 市 5 町の高校に募集要項を送り、応募者の中から毎年 4 名前後を選抜して月々の貸与を行っています。



このような米沢有為会の活動は、置賜地方の全域に及ぶもののご理解いただき、皆様のお子さんとか、お孫さんとかの進学に際し、学生寮とか奨学金の関係をご活用いただければと思います。

東京の学生寄宿舎は東京興譲館寮として、明治42(1909)年に小石川に開設されますが、昭和9(1934)年に新宿西大久保に新築移転、その後に

戦災を受けて再建され、さらに昭和41(1966)年に調布仙川に新築移転して、現在も存続して学生が在舎しています【図6】。私は、4年間お世話になりましたが、西大久保時代に入舎し、3年時の11月に仙川に引っ越して卒業しました。

喜一先生は伝通院の裏にあった小石川時代、明治44(1911)年8月から寄宿舎16番室に在舎し、同室は北沢敬二郎という人でした。先に豊橋に伺って、愛知大学東亜同文書院記念センターの本間喜一先生に関する展示を拝見したら、この興譲館気付で父小池熊吉から喜一先生宛の葉書が陳列されていました。

当時、米沢有為会は月刊で『米沢有為会雑誌』を発行しており、その中の記録によると、3か月で本間喜一退舎になっています。ただし、翌年の明治45(1912)年には、米沢有為会東京支部の秋季大会があり、上杉家当主である憲章公、それに北沢敬二郎、本間喜一ら計51名が、その会合に出席したことが記録されています。ということは、寮を出ても、有為会の活動には関係されていたということになります。

北沢敬二郎は2歳上で、東京帝国大学の同じ法科生、社会に出て住友に勤めた後、もともと大阪の百貨店の東京駅進出時の功労者、大丸社長・会長ということで、日本経済新聞の「私の履歴書」の中には、自分は大学時代に小石川の寮にいたこと、米沢有為会のこと、当時の館長は東京帝国大学で教育学の教鞭をとる吉田熊次博士だったという風に記述されています。

この吉田熊次博士は、東京興譲館寮の初代館長、旧上杉藩領内の現在の南陽市の出身ですが、この方が喜一先生の大学時代の保証人という関係にあります。なぜそうなったかという点では、米沢有為会創立以来の本間則忠の参加があり、その場での交流を通じて、保証人を頼まれた関係と想像します。現在も東京興譲館寮の食堂には、歴代館長の写真がずらっと掲額しており、一番左の冒頭に、吉田初代館長の写真が飾っており、私の学生時代の4年間ずっと、毎日見ていたわけですが、その写真はかなりお歳を召された時点のものです。

現在の東京興譲館寮は、24名の定員で、6畳個室です。寮費は2食付4万円台で、格安となっています。仙台興譲館寮は15名の定員で、これも個室です。今時の若い人たちは、どうも個室を好み、相部屋にすると、なかなか人が集まらないということもあるようです。

私の寮時代の話は、時間の関係で飛ばします。ただ、皆様にご理解いただいて、地元での興譲館寮に対する誤解を払しょくしていただくようお願いしておきたいと思います。まず、米沢有為会の学生寄宿舎は米沢興譲館高校の卒業生だけが入れるという誤解があります。これは全くの誤解で、明治以来、2,500 人を超す数の舎生がいるわけですが、その殆どは、現在でいうと置賜地方 3 市 5 町にある高校の卒業生が広く利用しています。川西町にある置賜農業高校の卒業生も現に在舎し、米沢だけでなく、置賜地方一円の高校の卒業生が入っています。寮の名前から誤解を生みやすいのですが、いわゆる置賜の育英寮としての実質で運営されています。

また、問題なのですけど、興譲館寮は安下宿だと。しかしこれは、今お話したような、共存共栄の郷土愛を基礎に設けられ、団体生活を通じた切磋琢磨の場を目指した自治学生寮であると、ご理解いただくことをお願いします、保護者も寮経営の関係者も、そのように心しながら学生と付き合っているところです。

酒を飲み過ぎる寮だという誤解はありますが、最近は余り飲まないのだそうです。これでいいのかなということもありますし、われわれの寮時代には大いに飲んで、社会に出てから酒では失敗しないという訓練を受け、お蔭でこれまで問題を起こさないで過ごすことができています。

明治時代の同郷人、喜一先生 20 歳の時、吉田熊次 37 歳ということで、17 歳の年齢差があります。実の叔父・甥の関係の則忠と喜一先生の年齢差は 26 歳で、実の子どものような年齢関係にあったわけです。

それでは、喜一先生は米沢有為会をどのように感じられておられたかを推察すると、端的に言って「冷たかった」という印象です。移民等に親が 1 世とか 2 世とか、という表現がありますが、則忠は東京に出た 1 世ですが、喜一先生は 1 世なのか 2 世なのか。喜一先生は、実際、玉庭の郷関を出た 1 世なわけですが、多分、精神的には 2 世だったのではないかと。それは則忠という 1 世の先達がいて、同郷人との交わりに重きを置く 1 世と、そこから距離を置きたがる 2 世ということではないかと。これは、私が自分の 2 人の子どもに感じることもでもあります。

私の息子は、喜一先生の同窓後輩で、同じ法曹の職にあります。親父が米沢有為会の仕事を熱心に担当して、これは寮でお世話になった恩返しなのですが、例えば東京支部の園遊会がありまして、私はその受付担当で、上杉家当主ご夫妻がお見えになると、私の小学生の娘と息子がご夫妻に胸章をお付けする役割でした。そういう風に関与させてきたものの、30 歳を過ぎてそろそろ会員に加えていただいてもいい年頃ですが、水を向けても、いつも距離を置きたがります。明治以来の米沢有為会の諸先輩も、同じ経験をされているのかもしれない。

同郷の先輩たちも、郷土を離れて、様々ふるさとに想いををせながら暮らしていたのだと思います。喜一先生は、そうは言いながらも、結局、東京商科大学の教授職を辞してからの時期に、郷土の先輩の結城豊太郎、当時の日本興業銀行総裁の紹介で、丸ビルに弁護士事務所を開きました。ですから、喜一先生も米沢（置賜）の縁から米沢有為会の会員は続けられて、会の活動には距離はあっても終生にわたって関係は保たれたということになると思います。

5. 教育界の先覚者・本間則忠

それでは、最後の章になりますが、教育界の先覚者としての本間則忠について、大急ぎで取り上げたいと思います。本間則忠は、山形の師範学校を経て高等師範学校を卒業して、文部省に勤めます。そして、文部省に勤めながら高等文官試験を受けて、40歳で合格します。

当時の高等師範学校の卒業生は、前に述べた通り、地方の旧制中学校や師範学校の教員となり、いずれ多くが校長となるという人材として、それだけでも社会的なステータスが高かったわけですが、そこに甘んじることはなかったのだと思います。それで、高級官僚の登竜門である最難関の高等文官試験を受けて、合格しました。かなりの努力を要したことと想像します。ちょうどこの受験勉強中に、同郷の日本銀行員であった結城豊太郎のノートを借りたというようなことを、喜一先生が後年に回想しています。則忠は、その後、島根、山梨、鳥取、大分、栃木の各県に赴任して、理事官等の職にあり、文部省系の学務畑のほか、内務省系の警察畑の職務に従事します。そして、大正 8(1919)年に文部省事務官に戻りますが、当時、既に根津嘉一郎のもとで則忠が中心的に関わり、我が国で初めての私立の旧制七年制高等学校である旧制武蔵高等学校が大正 11(1922)年 4 月に開校する準備が始まっている時点です。

ご承知のことと思いますが、東京にある多くの私立男子中高校のうち、難関の御三家は、麻布、開成、武蔵と知られています。現在の武蔵高等学校中学校の歴史は、この旧制武蔵高等学校の開校から始まります。則忠はその設立準備を一手に取り仕切り、校名の「武蔵」の名付け親であったことも記録にあります。そうするきっかけになったのは、旧根津財閥の総帥、鉄道王と呼ばれた、近代日本における代表的な実業家である根津嘉一郎との縁であり、根津の熱意を引き出したのが則忠でした。根津は山梨出身で、則忠の山梨県勤務の時代に面識ができたのでしょう。後年の大正 4(1915)年の暮、根津が別府温泉を湯治で訪れた機会に、大分県勤務の則忠が面談して、新しい私立の旧制七年制高等学校の設立の必要性を説き、根津がそれに応じて開校に漕ぎ着けたと、武蔵学園史が伝えています。

さらに、旧制武蔵高等学校の開校の立役者として、米沢出身の平田東助という官僚の大物がいます。平田は貴族院議員、枢密顧問官、農商務大臣、内務大臣等を経て、当時、臨時教育会議総裁で、則忠の紹介で根津から相談を受け、様々な実質的サポートを行います。則忠と平田との関係は、米沢有為会を通じた面識だったことは確実です。平田は喜一先生が東京興譲館寮に在舎した当時の米沢有為会の会長でもありました。則忠は家族ぐるみで、平田夫人とも、息子一家とも交流しています。

則忠は旧制武蔵高等学校の開校後、昭和 3(1928)年まで経営母体の根津育英会理事を務める一方、大正 13(1924)年に自ら創立した富士見高等女学校の初代校長を務めます。この学校は練馬中村橋にあり、後に山種証券創始者山崎種二の山種学園に経営が引き継がれ、現在の富士見中学高等学校として繁栄を見えています。そして、昭和 3 (1928) 年、則忠は米沢市表町に隠居しました。喜一先生が分家して籍を抜いた後、則忠は平田の孫（息子省三の子）を養子にします。興譲館同窓会の米沢中学時代の名簿に、本間忠吉という卒業生の名前があるのが、その方ではないかと思われます。

則忠は、昭和 13(1938)年 10 月 10 日に米沢市内で逝去し、生地の手庭で葬儀が執り行われ、ふるさとの墓地に埋葬されました。そのとき位牌を持ったのが、養子忠吉だったと、村人の中に伝聞があります。則忠夫妻の墓碑が手庭にあります。先ほどの「志を立て、郷関

を出す」からすれば、結局、自分の墳墓の地に戻り、自分の母上の実家である法印様、瑞光寺の読経で墓地に葬られたということになります。

引き続いて本間則忠の生涯について調べ、顕彰の一助にしたいものと思っているところです。

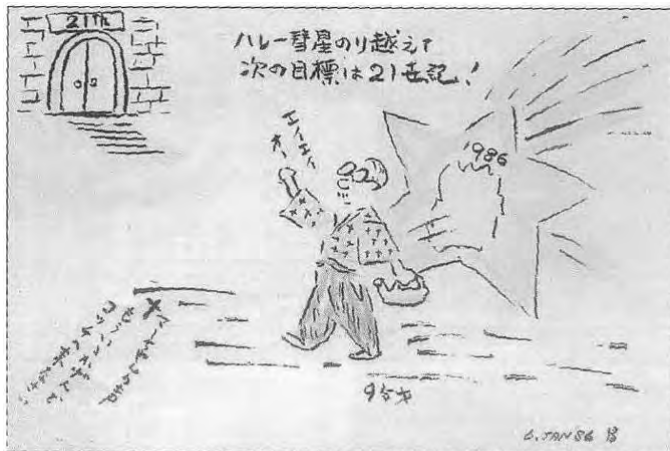
むすびに

むすびに、もう残りの時間はありませんが、私がずっと気になっている「そんぴん」に関連して少し触れたいと思います。

米沢人(置賜人)の気質として、「そんぴん」という風土があります。「そんぴん」を漢字でどう書くか、「損貧」や「外贅」ともあてられる向きもありますが、定説はなく、むしろ平仮名のままが一般的です。地元の川西町にお住まいの菊地直さんの『読む方言辞典 置賜のことば百科』(2007)の「そんぴん」の項には「変わりもの。強情。すねっぽい。旋毛曲り。ひねくれ」とあり、「そんぴんたかり」(「そんぴん」な人)の表現も紹介されています。また、山田政吉という方の『そんぴん物語』(1987)のあとがきに、「そんぴん精神」として「一徹で忍耐強く、批判精神が旺盛で世間一般になじまない、それでいて朴訥としていて童心を持ちつづけるという純情派が多い」と記述されています。私は小さい頃から耳にしている、このような地域の「そんぴん」の気質を肯定的に受け止めて、興味を持ってきました。

それでは本間喜一先生は「そんぴん」だったのかどうか。愛知大学に喜一先生が遺した「本間談話」の中で、東京商科大学のいわゆる白票事件に関連して、「頑固なところはね。そりもあるかもしれない。僕らだってね、損得を考えないで頑固になる。…」と述べておられます。損得を考えないで頑固であるというのは、まさに「そんぴん」な、やはり一徹な方だったのではないかと思います。

これは喜一先生が亡くなられる昭和 62(1987)年の年賀状【図 7】です。愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『愛知大学創成期の群像—写真集』(2007)に収録されていますが、喜一先生は明治 43(1910)の一高生時代と、最晩年の昭和 61(1986)年の 2 度、76 年周期で地球に接近するハレー彗星を自分の眼で見たことが、ご自慢であったということです。この年賀状は絵の得意な喜一先生のご次男昌二郎さんが描かれたユーモアあふれるもので、同じ絵の年賀状を私も頂戴していますが、ここでは愛知大学の出版物から引用させていただきました。



【図7】 昭和62(1987)年賀状

『愛知大学創成期の群像—写真集』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、2007)から

ました。先生は、この直後に亡くなられたということになります。

その年の5月15日、大久保駅近くの柏木教会で執り行われた喜一先生の葬儀・告別式に、私も参列させていただきました。その際、「山路越えて」の讃美歌が唄われましたが、私にとってその歌詞はとても心に響くものでした。

「山路こえて、ひとりゆけど」…
「松のあらし、谷のながれ」…「峯の雪とこころきよく、雲なきみ空

とむねは澄みぬ、みちけわしくゆくてとおし、こころざすかたにいつか着くらん」。この讚美歌は明治時代に四国宇和島の人が西洋の歌に歌詞を付けた古典であるとのことですが、この歌詞には、ふるさと玉庭の情景、そこからの出身者の想いが託されている感じがして、本間喜一先生のご人生を表現しているように思えたことを、私は胸に刻んでいます。

これで私の話は終わります。私は引き続き図書館という社会的な記憶装置の活動に関わりながら、今後とも川西町、愛知大学のますますのご隆盛をお祈りしたいと思います。また、本間喜一先生のご業績の顕彰が続けられるためには、ご家族の皆様をはじめ、先生とご縁のあるご一統様がますますご健勝にて、先生の足跡を伝えていただくことが重要であります。そのことをご期待申し上げて終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

参加者 明治の時代の貴重なお話、ありがとうございました。そこで上杉家のことが非常に強く出てきたお話でしたが、玉庭出身者と上杉家との結び付きといいますか、その人材の流れの中に、上杉家との流れの中に、1つの歴史があるのかなという部分で、他に何かお伺いしたいと思いますけれど。

大滝 ご承知のとおり、上杉藩の様々な日常は、やはり城下の家臣団が主になっていますし、経済生活のコアも城下にあったと思われます。われわれ在郷は、上杉藩の下級家臣団で、日常は開墾に従事しながら、いざという時に武力を担う役割であったわけです。桜田門外の変の際は、玉庭の郷土が門番で、井伊大老暗殺の騒ぎを直に聞いているという話が、村に伝わっています。

玉庭は城下の周辺に位置する在郷の1つであり、特に上杉家当家を中心とした、中心部分に日常的に関わったということはないだろうと思います。伝統的に有為会の雰囲気としては、郷土愛を前提にして、互いが縦の上下関係でなく、横の関係で率直に話し合ったり、お酒を飲み合うというような雰囲気があり、このような米沢（置賜）に向けられた郷土愛を共有する集いの中に、玉庭出身の先輩も加わって、人との縁を満喫していたということなのだと思います。特に玉庭出身の人が…というよりは、様々な利害関係にとらわれない相互の会話が成り立つことが許される開かれた場の参加者のひとりだったということです。

米沢有為会は、お話した通り、いわゆる米沢だけの団体ではなく、発足時から置賜全体にわたることを前提としており、今度の公益法人制度改革で新たな公益社団法人に移行する際に歴史に鑑みて「米沢有為会」を引き続いて名乗ることになりましたが、実体は置賜全体の育英団体「置賜有為会」なのだというご理解の下で、今後とも様々関与していただければと思います。お答えになれば幸いです。

付記

本稿は、2015年7月26日、川西町農村環境改善センターで開催された川西町・愛知大学主催「本間喜一先生を顕彰する講演会」における講演記録に加筆したものです。講演当時は国立国会図書館長、2016年3月31日に退任。

本稿のまとめに際し、本間晴七、藤田有宣、穂保丈助の各氏からご教示いただいたことを感謝します。